

投稿規定 (平成五年六月一日改訂)

- 一 本誌に掲載する論文は医史学研究に貢献しうるもので他誌に未発表のものとする。
- 二 投稿者の資格は共著者も含めて本学会会員とする。ただし編集委員会が特に認めたものはこの限りでない。
- 二 原稿の区分は、原著・総説・研究ノート・広場・資料・紹介・消息等とし、その採否は編集委員会が決定する。原著・研究ノートは編集委員会の委嘱する審査委員が査読し、それにもとづいて採否および区分を編集委員会が決定する。

四 執筆要項

- a 原稿は二〇〇字または四〇〇字詰め縦書き原稿用紙を使用のこと。ワープロ(縦書)の使用も可。一行は二〇字または四〇字とし行数を原稿に記すこと。
- b 原著・総説・研究ノート・広場・資料の場合は、欧文表題・ローマ字著者名を原稿の末尾に記し、原著および研究ノートにおいては欧文抄録(二五〇語以内)とその対訳和文を添えること。
- c 欧文題名・欧文抄録での日本人名の表記については、五 外国語原稿のe項に準ずるものとする。
- d 原稿の末尾に著者の所属および連絡先を記載すること。
- e 表記は原則として常用漢字・人名用漢字以内で、新か

f なづかいを使用する。難字は欄外にも楷書で別記する。外国人の人名・地名は、よく知られたもののほかは初出の箇所に原綴またはローマ字を添えることが望ましい。

g 図・表は明瞭に書き、写真は原則として白黒の紙焼きとする。裏には著者名・番号・天地を明記し、挿入位置を原稿中に明示すること。

h 注・参考文献は末尾にまとめ、本文初出順に算用数字の通し番号(1)、(2)……をつけて、照合の便宜をはかること。

i 参考文献の引用の仕方は①雑誌の場合は、著者名・論文題目・雑誌名・巻・号・頁・年次(西暦・和暦いづれも可)の順に書く。②単行本の場合は、著者名・書名・該当頁・発行所名・発行地・年次を記載する。③編著書の場合は、著者名・論文題目・著者名(編者名)・該当頁・発行所名・発行地・年次とする。④古文獻の場合、江戸時代以前の国書については、原則として、編著者名・書名・成立年・刊行年(もしくは抄写年)・発行者名・発行地など、必要ならば該当丁(葉)あるいは頁数もしくは項目名を記し、稀覯本については所蔵者名も明記すること。清代以前の漢籍(和刻本・日本写本も含む)についても、前記に準ずる。

(例)

【雑誌】宗田 一「司馬江漢の西遊をめぐって」『日本医史

学雑誌』三〇巻四号、四二五〜四三一頁、一九八四（昭和五十九年）

【単行本】富士川游『日本医学史』五四頁、形成社、東京、一九七二（昭和四十七年）

一九七二（昭和四十七年）

【編著書】大塚恭男「中国医学の伝統」村上陽一郎編『医学思想と人間』（知の革命史⑥）六三〜九四頁、朝倉書店、東京、一九七九（昭和五十四年）

五 外国語原稿

a 外国語原稿は、原則として英語・独語・仏語いずれかとする。

b 外国語の原稿は原則として、一行約六五字、一頁に二五行、ダブルスペース（一行おき）で印字する。

c イタリック・ゴシック・ギリシャ文字等はかならず朱筆で指定する。

d 日本語・中国語を欧文表記する時は、初出の箇所に漢字を付記する。

e 日本人名を欧文表記する際には原則として名を先に、姓を後とする。ただしそれが不自然な場合はケース・バイ・ケースで扱って差し支えない。

f 中国語の欧文表記は、現代中国語音のローマ字綴り（ピンイン式）とする。引用文献がウェード式の場合は、この限りでない。

g 注・文献・図表については、和文原稿の規定に準ずる。
h 題名中に書名が出現する場合は引用符「」で囲み、イ

タリック体を使用しない。

（例）

【雑誌】Nutton, V.: Galen in the Eyes of His Contemporaries. Bulletin of the History of Medicine. 58: 315-324, 1984.

【単行本】Temkin, O.: The Falling Sickness; a History of Epilepsy from the Greeks to the Beginnings of Modern Neurology. 2nd ed. 25—40, Johns Hopkins University Press, Baltimore, 1971.

【編著書】McC. Brooks, Ch. and Levey, H. A.: Humorally -Transported Integrators of Body Function and the Development of Endocrinology. 183—238 in McC. Brooks, Ch. and Cranefield, P. F. (eds.): The Historical Development of Physiological Thought. Hafner, New York, 1959.

六 投稿原稿は、コピーを一部添付すること。原稿は著者校正の際も原則として返却しないので、手元にコピーを一部残すこと。

七 著者校正は、原則として原著・総説・研究ノート・広場・資料を対象とし、初校のみとする。校正は印刷上の誤植を訂正するに留め、原稿の改変や、その他の組み替えは認めない。校正刷りの返送期日を厳守すること。期日までに返却されない場合は責とみなす。

八 刷り上がり一〇印刷ページ（四〇〇字詰原稿用紙で二四

枚)までは原則として無料とし、超過分と図表製版の実費は著者負担とする。

九 論文別刷は五〇部単位とし、実費で作製する。別刷希望者は校正刷同封の申込書に部数を明記すること。

編集後記

風薫る五月に、函館で開催される第九回総会の抄録号をお届けする。今年の総会はいくつかの点で、在来の総会とはひと味ちがった学会になるようである。年毎に演題が増加して十分な口演時間を確保できなくなったためであろうか、今回初めてポスター・セッションが設けられた。これこそ第一の斬新な試みといえよう。おおくの臨床学会や基礎医学の学会ではつとに採用されている発表方法ではあるが、医史学会としては初めての試みである。そのため戸惑いの様子がないわけではなかったが、会長自らもポスター発表にまわったことによつて、その戸惑いも幾分緩和されたのではないだろうか。しかし学会のハイライトともいへべき会長講演をじかに聴くことができないのは、一抹の寂しさを感じないわけにはいかない。

医史学の基本的な問題である資料の保存と医史学教育について、それらたつぷり時間を確保したシンポジウムが開かれることが、新機軸の第二点である。医学教育の新しいカリキュラムという名の下に一般基礎教育の講義時間が圧縮されて、そのあおりをくつて医史学の講義も削減されている大学がおおいとさく。このような状況にあつてどのようにに医史学

一〇 原稿の送り先

千二三八四三 東京都文京区本郷二丁目一一一

順天堂大学医学部医史学研究室内

日本医史学雑誌編集委員会

教育がおこなわれるべきか、じっくり考える時期が到来したといえるであろう。

学会誌へ投稿された原著論文や研究ノートについては、査読制度という関門によつて一定のレベルをもつた論文が掲載されるシステムになっているが、総会の演題についてはそのような制約は全くないのがわが学会の現状である。そのためばかりではないとおもうが、医史学会に馴染まないような演題も時折顔を見せる結果になる。そのような演題も会員からの活発な発言と討論によつて、学会に相応しい内容に盛り上げていく必要があるのではないだろうか。ともあれおおくの会員が参加されて、活気あふれる総会をむかえたいとおもっている。函館でお目にかかるのを今から楽しみにしている。

(深瀬 泰且)

前号(一号)資料の一部(二二一頁〜二六六頁)で通巻頁付けに誤りが残ったことをお詫び致します。(編集委員会)